ICT 海外ボランティア会会報

No. 31

2012 年 4 月 16 日（月）

Home page　：http://www.ictov.jp/
e-mail　　：sv@info.nttob.org

目次

◆ 巻頭言
アジアの元気の伝道師を目指して
衆議院議員　田嶋　要氏

◆ 特別寄稿
本体と付属装置は安全性において同格
（真藤語録からその５）
本会顧問　石井　孝　氏

◆ トンガ王国特集
トンガでプロジェクト開始
本会事務局長　加藤　　隆　氏
前ＳＶ（トンガ）鈴木　弘道　氏
本会会員　　内山　鈴夫　氏

◆ ＪＩＣＡ・ＳＶ春募集
事務局
平成２４年度春募集要請案件
ＳＶ応募者のための「なんでも相談会」

◆ 会員リレー寄稿（第１７回）
ジャパニーズフェスチバル・イン・トンガ
元ＳＶ（トンガ）村上 勝臣　氏

◆ ＪＩＣＡ「メールマガジン配信登録」のおすすめ
事務局

巻　頭　言

アジアの元気の伝道師を目指して

衆議院議員　　田嶋　要

先日、地元活動の日程をやり繰りして、二泊三日でフィリピンに行って来ました。フィリピンは１９９５年から２０００年まで私が暮した場所ですが、それ以来一度も訪ねることができず、実に１２年ぶりの訪問となりました。

現地では、当時私が経営アドバイザーとして働いていたスマート社（携帯電話事業会社）の同僚が大勢、暖かく私を迎えてくれました。それまで再会はなかなか叶わなかったけれど、海の向こうでみんな元気で、変わらずに暮らしていたことが確認できて、本当に感動しました。会社も、私が現地にいたころは総勢わずか１３０名のベンチャー（そこにＮＴＴが出資して、アドバイザーを派遣）でしたが、今は買収なども重ね、６万人を超えるフィリピン最大の会社の一つにまで発展していました。また、同じローカルパートナーが開発を手掛けていたフォートボニファシオ地区を案内してもらったのですが、当時はぺんぺん草が生えているような場所だったのが、現在はまるで赤坂サカスかどこかと見紛うような空間が果てしなく広がり、仕事帰りの若い男女で大変な混雑、まるで東京ディズニーランドにいるような感覚でした。

あのフィリピンでもこんなに変わっていくんだ。まあこんな言い方は失礼ではありますが、フィリピンは確かに「アジアの劣等生」などという不名誉なレッテルも貼られていた国です。しかし、人々はいつも明るく、暖かく、町も活気に満ち溢れています。日本のようにハイテク商品が溢れているわけではありませんが、町にＬＲＴ（マニラでは主として高架を走っていますが、輸送量を増強した路面電車のような交通システム）も延び、ビルもどんどんと建ち、新しい町が生まれ、力強く発展しているのです。

確かに、国民の平均年齢の違いとか、発展段階の違いとか、日本との差はあります。しかし、いろいろな意味で資産をたくさん蓄積してきた日本が、それらを最大限生かし、今よりもさらに活気のある社会をつくることが、できないはずがありません。特に大震災の後でもあり、ややもすると、内向き、下向き、後ろ向きなマインドに陥りがちな今の日本ではありますが、そんなときには、「海外をどんどん見てみよう」と私は声を大にして言いたいと思います。あれこれ壁にぶち当たったら、理屈抜きに海外を訪ねれば、必ずや何か大切なものに気づかせてくれると私は確信しています。

ＩＣＴ海外ボランテイア会の皆さんには、その豊富な海外経験を活かして、是非とも「アジアの元気の伝道師」になって頂き、日本人が自信を持ってもっともっとアジアに雄飛できるよう、その先頭に立って頂けたらと思います。皆様の益々のご活躍とご健勝をお祈りいたします。

特別寄稿

本体と付属装置は安全性において同格

本会顧問　石井　孝

【元ＮＴＴ社長 真藤 恒氏の語録】

付属品は安全性において、必要性においても本体と同格である。それなのに、そんなものは一段グレードが低いものだとさげすんで、同格であるべきものを同格扱いしない場合が多い。

どんな機械であり装置であっても、エンド・ユーザーが手を触れるのは、むしろ付属装置であり、付着物なのである。そこに信頼性がなければ、どんな高度な本体を作っても話にならない。

いろいろな事故にしても、10 のうち 7 割までが付属品に問題の種がある。使い方が十分教育されてなかったとか、部品の位置が悪かったとか、技術者のいままでの常識いえば、くだらないことなのだけれど、そこが一番大事なのである。

【石井　孝氏の一言】

あの 3.11 から丁度一年を経過した今回は、この語録をお届けすることにした。

トータルシステムの問題点を的確に見極め、必要な手立てを講ずる。真藤さんは、常に物事の本質を見抜いてそれに対応する事を心掛ける、実にプラクティカルでかつ強い指導力を持つエンジニアであった。

トンガ王国特集

トンガでプロジェクト開始　－百里の道も一歩から－

Ｉ．プロジェクト形成のきっかけ

本会事務局長　加藤　隆

当会の目的は「シニア海外ボランティア (SV) に関心をお持ちの方々へ情報を提供し、SV への応募を奨励する。また派遣中 SV をサポートする。更に海外で活躍できる人材育成のために、プロジェクトを発掘し、on the job training の場を提供する」ことであります。この目的遂行のため、多くの方々のご尽力により、この度ささやかながらプロジ

ェクトの発掘に成功しましたので、形成のきっかけ、形成までの経緯、支援状況の概要について、当事者により紹介させていただきます。「百里の道も一歩から」の心境です。

（１） 元気が必要な ICT 産業

情報通信国際交流会（IFIS）なる団体がある。その前身は 1951 年に、その後電電公社総裁になられた梶井　剛氏の提唱で、通信機器の輸出振興を目的として設立された。そして大来佐武郎氏（元外務大臣）等の支援をいただき、1998 年に故田代穣次氏により、現在の形として再出発され現在に至っている。

IFIS の会員にはかって海外ビジネスの第一線で活躍なされた方、現在携っている方もおられる。その有志により、わが国 ICT 産業の国際競争力の復興に向けて意見交換会が開始され、総務省にも呼びかけさせていただき、現状認識や対応策に関する意見の交換が熱っぽく行われた。

ODA のアンタイド化が大きく起因すると言われているが、わが国の発展途上国における、電気通信・情報通信分野での案件形成が思うにまかせず、その結果海外要員の on the job training の場が不足し、この分野で活躍できる人材が極端に不足し、それが悪循環をもたらしているとの意見が一致した。

これに歯止めを掛けるにはどうすべきかとの議論の中で、現在世界各国で力を入れている PPP（官民連携による案件形成）等を活用し、日本企業のみによる、定年退職したての人材を中心として案件形成が有効であろうとの議論になった。

（２） 当 ICT 海外ボランテイア会（ICTOV）の出番

当会の活動の一つに、派遣中 SV サポートがある。それえの対応策として、当会 山下満男さんの発案で「海外ボランティア支援体制」が組織された。ほぼ同時に SV として当会 鈴木弘道さんが、トンガ王国へ情報通信省 ICT アドバイザーとして派遣された。そして特に中国企業の同国に対する攻勢が激しく、必ずしも同国に相応しくない通信システム構築の提案を、しかも有料で提案してきている。その現実を勘案し、日本から何らかの形で同国に寄与できないだろうかとの支援を当会に呼びかけてきた。

当会では、この案件を人材育成の場の形成、および汎日本的な取り組みに結びつけるべく、当会 内山鈴夫さんが中心となってトンガ国への支援に根気強く取り組んできましたが、同国から APT（注１）へ「ICT を活用した防災対策プロジェクト」として提案がなされ、この度同国に対し APT より採用の通知があった。この動きに JTEC（注２）及び BHN（注３）に同調していただいている。その模様を鈴木・内山のお二人より報告していただく。

注１．　APT(アジア・大洋州電気通信共同体)

アジア、大洋州地域における電気通信の均衡した発展を目的として、研修やセミナーを通じた人材育成、標準化や無線通信などの地域的政策調整を行う。

（加盟国 34 ヵ国、準加盟国 4 地域、賛助加盟員 110 社、事務所タイ・バンコック）

注２．　JTEC（財団法人 海外通信・放送コンサルティング協力）

開発途上国の電気通信、放送および郵便に関するコンサルティング業務、プロジェクト協力業務を通して、国際協力の推進と通信の発展に寄与することを目的とする。
（理事長 内海善雄氏）

注３．　BHN（特定非営利活動法人 BHN テレコム支援協議会）
情報通信の専門家が英知を活かし、世界の情報通信格差（ICT デバイド）を是正することにより、人々の生活向上に資する。大規模災害の被災者や紛争難民への緊急人道支援も行っている。（会長 桑原守二氏）

Ⅱ．トンガ国における提案までのいきさつ

トンガ国　首相府情報通信省
前 SV　鈴木　弘道

トンガはサンゴ礁の国。船で近くのリゾート島に行くと海はコバルトブルーに輝き砂浜は白くさらさらと、絵葉書そのままの光景だ。私は 2009 年 10 月、そんな国トンガの情報通信省に ICT 政策支援の目的で派遣された。大臣は女性で、ICT 政策より数倍メディア政策に関心が高く、新聞発行の届け出制の提案など、メディアと派手な論争を繰り広げていた。世論は情報公開と政策決定プロセスの透明化を求めており、政府内でもその声は強かった。そのため 2010 年 1 月政府ポータルを構築することになった。

新首相との会談

バ バ ウ

経験の無い分野だったが、担当者の熱心な作業もあり、短期間に立ち上がった。コンテンツの更新は毎日行われて新鮮なこともあり、アクセス件数は当初と比べかなり増えている。政府ポータルでの JICA ボランティアの紹介や、写真撮影などは、この時始めたが、反響もあって意外に面白く、いつの間にか自分の仕事となっていた。特に写真については政府の“公式カメラマン”と自ら称し、自由な取材が出来た。

（1）政治改革による新しいスタート

2010 年 12 月、政治改革の一環として、国会議員の選挙が行われた。一緒に仕事をしていた同僚のバカタ氏も退路を断って立候補、見事に当選した。翌 2011 年 1 月、当選議員による選挙を経て首相が選ばれた。これまでは国王が首相を指名していたので、民主化の動きとして近隣各国の注目を集め、海外から

離島の光景

もメデイアが取材に駆け付けた。各省では、
誰が自分の省の大臣になるかに関心が集まった。
私の省では、元同僚かという声もあったが、ノブル出身の首相が兼務することになり、予想は見事に外れた。バカタ氏は１年生議員ながらスポーツ、訓練、雇用大臣のポストを得た。

（２）ICT 海外ボランティア会の山下満男さんへ相談

首相（前ページ写真「新首相との会談」の左）は ICT 利用に積極的で、早速 CEO から、ブロードバンド時代に対応した ICT ポリシーの見直しを依頼された。ICT 海外ボランティア会の山下満男さんとも相談し

「トンガの ICT 戦略プランの作成」

「インプリは日本の ODA 活用」

という方針をたてた。戦略プラン作成の JICA 短期専門家をトンガに派遣、並行して ODA を申請するというものだ。しかし ODA はハードルが高い。そこでトンガ日本大使館、JICA 事務所へも相談した。

（３）APT 公募への方針転換

JICA の短期専門家が行う作業事項については、既に検討を終え派遣を申請するばかりになっていた。しかしトンガでは中国企業が提案してきた電子政府の検討に関心が移り、JICA 専門家の派遣を提案するにはタイミングが悪くなっていた。さらに ODA は結論を得るまでにかなりの時間を要し、実現の保証も無い。これに対して APT プロジェクトは、人材育成や、パイロットシステムの構築など、トンガの現状に沿うものだ。このため、これまでの検討を凍結し、先ずは、実効性の高い APT に絞って計画を進めるべきと判断した。CEO（副大臣に相当）の了解を得て、これまでの方針を転換、トンガとしては初めて APT プロジェクトへ応募することにした。

首相府の建物

大臣になった元同僚と、議会初日

（４）トンガ側の提案準備

前年 2010 年の APT 公募は 9 月だったが、2011 年は 6 月と早まった。APT のプロジトクトには J2（Support for development of researches and engineers in advanced ICT）と、J3（Support for pilot project）がある。事前の検討どおり、J2 からの応募とした。

この間日本側では方針転換に伴う、プロジェクト提案の体制などが検討され、ICT 海外ボランティア会に所属する内山鈴夫さんとのメールによる意見交換が始まった。先ず

トンガ側の要望条件をまとめる必要がある。同僚でカウンターパートのフェレティは海外出張の後、直ぐに１ヵ月の長期休暇に入ってしまった。紹介者を頼りに各省の窓口を探し出すところからトンガ側の作業はスタートした。

Ⅲ．国内でのサポート活動とプロジェクトの概要

会員　内山鈴夫

（１）プロジェクトの概要

プロジェクト名は「トンガ国における先端ICT利用によるe-災害通信の研究」である。このプロジェクトの選定経緯は、まずトンガ国政府の2011年の政府方針(総理大臣ツバカノ首相)とトンガ国情報通信省（MIC：大臣は首相が兼務）の政策指針ならびに日本政府によるボランティア派遣など技術協力の経緯と実績が密接に結実した結果と思われる。即ち、トンガ国は世界で自然災害被災国のうち、ワースト順では世界第2位(日本は第5位)である事から国の防災の政策順位は高く、情報通信分野では第１番目“政府内の情報通信システムの統合と計画実施（電子政府）”の次に“防災ICTの確立”とされている。特に災害発生時の災害情報伝達が従来はAM放送であったが、情報伝達が不確で、また避難情報用の緊急放送設備が皆無であった。これを改善するのが本計画である。

一方わが国に於ける関係機関からの支援、国際協力の面からも強力な協力支援が行われており、MICにはJICAからSVとして鈴木弘道さんが派遣され情報通信省アドバイザーとして重要な役割を果たした。またトンガ国国家緊急災害管理対策会議(NEMO)にはJICA海外青年協力隊員2名が派遣され、高い信頼と期待が各方面から寄せられている。これらの経緯から本件はトンガ国においてAPT公募に対し優先度第一で提案された。

（２）トンガ国防災支援プロジェクトと日本の支援体制

国土面積750km²(対馬とほぼ同じ面積)、人口12万2､540人(日本の約2%)（2010年7月米国国務省）で、オセアニア 南太平洋の南緯20度、西経175度に位置するトンガ国は、169の島から構成される島嶼国である。総人口約13万人の約25%が首都ヌクアロハ市周辺に、また大部分の人口は農業、漁業及び観光業に従事している。国民1人当りのGDPは3,260ドル(2010年世銀)と貧困国よりかなり高いものの貧困層が人口の全体の24%であり、失業率は12%で毎年貿易赤字が極端に大きく、世界銀行、アジア開発銀行などの援助を得ている。さらにサイクローン、津波や地震などの自然災害による被害で、地理学的なハンディーにより、国全体としての恒常的な発展が阻害されている国である。

本件国内支援として、（財）海外通信放送コンサルティング協力（JTEC）、BHNテレコム支援協議会（BHN）及び当ICT海外ボランティア会が参加している。

ＪＩＣＡ・ＳＶ春募集

事務局

JICA 平成24年度SV春募集は、来る4月1日（日）より5月14日（月）まで行われます。JICA主催の募集説明会については、前会報（No.30）でお知らせしましたが、それに引き続き、今会報では「要請案件」並びに「なんでも相談会」について紹介いたします。

平成２４年度春募集要請案件　－ICT 関係者が応募し易い案件を抜粋－

（１）　情報･電子・電気（JICAホームページ掲載内容を基に作成）

指導科目	派遣国	内　　容
情報経営戦略	ﾊﾟﾗｵ	（通信公社）島嶼間通信事業経営戦略策定(光通信導入等)
ｺﾝﾋﾟｭｰﾀ技術	ﾈﾊﾟｰﾙ	（技術専門学校）ITｺｰｽのｶﾘｷｭﾗﾑ作成､ｺｰｽ修了者への就職支援
ｺﾝﾋﾟｭｰﾀ技術	ﾊﾟﾅﾏ	（国家計画通信局）ITﾈｯﾄﾜｰｸの運営､技術全般の助言･指導
ｺﾝﾋﾟｭｰﾀ技術	ﾍﾟﾙｰ	（国立障害者ﾘﾊﾋﾞﾘｾﾝﾀｰ）導入予定の自動診療ｼｽﾃﾑ構築の方策設定
ｺﾝﾋﾟｭｰﾀ技術	ﾓﾛｯｺ	（大学）既存ｼｽﾃﾑの統合･拡充のための設計･構築･運用･管理助言
電子工学	ｶﾝﾎﾞｼﾞｬ	（総合技術専門学院）電子機器ｺｰｽで実習教官指導
電子工学	ｶﾞｰﾅ	（技術管理研究所）電子工学研修ｺｰｽの企画･開講支援、学生指導
電子･電気機器	ﾎﾝｼﾞｭﾗｽ	（国立職業訓練庁）講義､実習指導
電子･電気機器	ﾊﾟﾗｸﾞｱｲ	（大学）卒業研究支援等を通して学生･教員の資質向上に寄与

（２）　電力

電力	ｶﾝﾎﾞｼﾞｬ	（電力公社）配電系統改善策の技術指導･信頼性向上に寄与
電力	ﾊﾟﾗｵ	（電力公社）ﾃﾞｨｰｾﾞﾙ発電機の運転･維持管理の技術指導

（３）　人材育成

理数科教師	ﾊﾟﾌﾟｱﾆｭｰｷﾞﾆｱ	（教員養成大学）講義、同僚講師へ支援
理数科教師	ﾎﾞﾂﾜﾅ	（教育ｾﾝﾀｰ）現地教師の教育方法支援
理数科教師	ｶﾞｰﾅ	（教員養成校）理科（特に化学）教育法の授業
理数科教師	ｳｶﾞﾝﾀﾞ	（小学校教員養成校）算数･数学教育法指導､小学教諭志望者指導

（４）　渉外促進

渉外促進	ﾄﾞﾐﾆｶ共和国	（商工会議所）ﾎﾞﾗﾝﾃｨｱｸﾞﾙｰﾌﾟに対する派遣先との連携支援･活動調整
渉外促進	ﾍﾟﾙｰ	（国立障害者ﾘﾊﾋﾞﾘｾﾝﾀｰ）ｸﾞﾙｰﾌﾟ派遣ﾎﾞﾗﾝﾃｨｱの業務調整･支援

ＳＶ応募者のための「なんでも相談会」

JICA SV 春募集に呼応して「なんでも相談会」（主催：SV 経験を活かす会、共催：JICA、協賛：JOCA）が開催されます。

場所はJICA地球ひろば(広尾)及びJICA横浜で並行して開催されます。

開催の日時は3月25日(日)から5月5日（土）の期間の 土曜 及び 日曜（4月22を除く）の13時から16時までですが､地球ひろばでは4月7日（土）･4月21日（土）の両日、JICA横浜では3月25日(日)･4月15日(日)の両日は、12時から16時までです。(この日はJICAの募集説明会が並行して行われます)

この相談会ではSV経験豊かな同会会員が対応しますが、対応者の氏名・派遣国・専門職種については、SV経験を活かす会のホームページに掲載されておりますのでご覧ください。

会員リレー寄稿 第１７回

ジャパニーズフェスチバル・イン・トンガ

元トンガ・SV（2006.4～2008.4）　村上　勝臣

トンガは太平洋に浮かぶ小さい王国です。地理的、物理的紹介は「地球の歩き方」等の諸誌にお任せすることとして、2006年4月から2年間、私が勤務してトンガで出会った諸先輩、同僚達の活躍を紹介しょうと思います。

１．みんなが主役を演じた日　―ジャパニーズフェスチバル・０７イン・ババウ―

―8月10日金曜日午前10時半、定員17人中、15人は日本人ボランテイアを乗せ、首都ヌクアロファを離陸したプロペラ飛行機は、30分後機体の割には大きな爆音を響かせて、900キロ北、紺碧の海に浮かぶ人口1万5千のババウ島へ着陸した。（写真1）

10年前、日本の無償援助で開校したババウ高校で行われる「ジャパニーズフェスチバル」を成功させようと参加した、老若男女のボランテイアの幸先良い出だしだった。

写真１　ババウ空港

写真２　トンガ向けたこやき調理

総勢17名の構成は主催者6人の日本語教師と、専門マチマチの老若男女のJICAボランテイア。出迎えたババウ高校長の車で目的の高校へ到着し、直ちに13日のイベントへ向けタイムテーブルに従って準備作業が始まった。（写真2．写真3）

そして　8月11、12日、たこ焼き料理、メイン出し物のよさ恋ソーラン舞の練習など、祭準備に寸時を惜しんで没頭した。多分、みんな熱病に取り憑かれていたようだ。『日本文化を何とかババウの人に紹介しょう症候群』という奴のようだった。

開催当日の仕掛けはこうだ。開幕1部は「よさ恋ソーラン舞」で幕を開ける。

写真３　よさこいソーラン踊りリハーサル

2部では「日本子供の遊び」として福笑い、輪投げ、ケンダマ、玉居れ、西瓜割り、折紙、又日本の味紹介コーナーを設け「日本の子供の味」を紹介する。具体的には蛸焼き。最後は締めくりとして、みんな輪になって東京音頭を踊り「涙そうそう・トンガ語版」を贈るというものだ。

写真４　フェスチバル開会式（ババウ高校）

—8月13日午前9時、イベント開始。トンガの慣習、イベント前のお祈り、賛美歌がトンガ側主宰で行われた後、ボールはこちらに投げられた。(写真4)

司会は日本語教師のK君とI嬢。司会者は、挨拶から300名の高校生達と返事の掛け合いから順調に入る。I嬢が「ソーラン節」の歌詞と踊について流暢なトンガ語で説明する。そして、ソーランと司会者が発すると300名の「ソーラン」が返る。ドッコイショと発すると天井が抜けんばかりの「ドッコイショ」が応える。

目論み通り300名のババウ高校生と、先生は完全に司会者の術に落ちていた。導入の「よさ恋ソーラン」はトンガ人の「ソーラン」と「ドッコイショ」の合の手が入り、大喝采だった。12名の選ばれたハッピ姿のボランテイアは舞台一杯一糸乱れず踊った。

写真５ 素敵ね！着物

私の役は、大団扇を持って舞台の裾で扇ぎ役。こうなると3時間の日本祭りは盛り上がりの電車道であっという間に過ぎて行った。

—2部、私の受け持った「ケンダマ・達磨落し」を中心にした、玩具コーナーも人だかり、隣のK嬢担当の福笑いコーナー、ババウ高校生が手伝った、輪投げコーナー、A嬢、S嬢が担当の折紙コーナー、全てに人だかりが出来た。メイン会場の「玉入れ」「西瓜割り」から歓声が絶えず。たこ焼きも好評完売。(写真5ババウの着物姿)

東京音頭をトンガ人と共に踊り、舞台に戻り、最後に「トンガ語バージョン涙そうそう」で閉めるまで、アットいう間の出来事だった。イベントが済むまで誰もが何処かで何かをヒタスラ演じていた。(写真6ご苦労さんでしたお互い)

写真６ 先生の祈念写真

—13日午後6時、17名のボランテイアは、世界各地から訪れた50隻を超え

るヨットの停泊するババウ湾の水辺のレストランにいた。

湾の遥か彼方の西の海へ落ちていくババウのサンセットを眺めながら、注文した料理を待っていた。この贅沢な時間を共有しながら、それぞれの演じた役割に、満足そうな 17 の顔が抜けるように透き通ったババウ湾の水面に映っていた。(写真 7 ババウ港のサンセット)

写真 7 ババウ湾サンセット（レストランから）

2．ジャパンーズフェスチバルの経緯

この祭のことは良くは解らないが JICA 事務所の O さんの話によると日本文化をトンガに広める目的から首都ヌクアロファのある「トンガタプ」「ババウ」タプ島の 30 キロ位の北に位置する「エウア」で順送りに開催してきたという事である。

私の赴任した 06 年はタプ島で開催された。08 年はエウア島で開催される予定であるが多分後継者たちは見事に成功させたと信じている。

当時は大使館がなく、フィージーの大使館の所掌下であったが、ジャパニーズフェスチバルには大使館が積極的に協力してくれ、展示した日本の着物、人形など貸し出してくれて祭りを盛り上げてくれた。

3．小所帯のトンガ JICA のこと

トンガは、国が小さいだけに JICA 事務所もこじんまりとしてまとまっていると感じた。当時 SV、JOCV 合わせても 40 名そこそこであったのでボランティアは何時も行動を共にした。以前に勤務したカンボジアは大所帯だったので若い人達とは繁く交流できなかったがトンガは頻繁に交流した。事務所と協力隊の寮が道路を挟んで目と鼻の先である事も功を奏して私たちは事ある毎に寮に集まり話し合った。協力隊は 4 半期毎に入れ替えがあるので歓送迎会も全員出席で実施した。(写真 8)

写真 8 歓送迎会（中抜きの両端ＯさんＮさん）

JICA 調整員の O さんはトンガ人と結婚していて、トンガと日本の架け橋的役割をしてくれた。トンガテレビに勤務した同期の N さんは O さんと組んで JICA ボランティアの活動をトンガテレビで放送してくれた。勿論ジャパニーズフェスチバルも毎回自ら演出して放送した。

トンガには、中国人、韓国人も多く住んでいる。従ってトンガ人から見れば当然見分けがつかないのはもっともな話だ。良くトンガ人から「ユアナショナリティ」を問われ

た。「ジャパニーズ」と答えるとニコッと帰って来るトンガ人の笑顔は何にも代えられないトンガの私へのお土産だった。

メールマガジン配信登録」のおすすめ

事務局

当会顧問・JICA 青年海外協力隊事務局募集課長 佐藤　睦氏からのおすすめです。SV および JOCV 募集案内等情報満載の「メールマガジン配信登録」をしてください。きっと皆様のお役に立つと思われます。

手順は次の通りです。

① Internet Explore で「JICA」を検索
② 「JICA-国際協力機構」を選択し HP を開く
③ 右手の JICA ボランテイアをクリック
④ 情報満載メールマガジンをクリック
⑤ メールマガジン配信登録をクリック
⑥ 所定の個人情報を記入

- (http://www.jica.go.jp/volunteer/index.hotmail)

会報お読みの方々へのお願い

本会の拡充と共に、会報の充実も計ろうといたしております。

それで会報をお読みになった皆様のご感想、ご意見、ご要望は、会報作成のみならず、本会運営に当たっても大きな方向付けに役立ちます。どうぞ遠慮なくお送りいただきますようお願い申しあげます。

送付先は、編集部　加藤隆(kato2415@jasmine.ocn.ne.jp) ,または
村上勝臣(katsumi.murakami@jcom.home.ne.jp)までお寄せ下さい。

編集後記

・衆議院議員田嶋　要様から「アジアの元気の伝道師を目指して」と題して巻頭言をいただきました。田嶋様は 1985 年電信電話公社に入社されました。そして海外業務にも従事され、民間ベースでの本格的な海外出資活動の草分け的な存在で、フィリピンのスマート プロジェクトは田嶋様が発掘したプロジェクトとのことです。そしてスマート社の経営アドバイザーも務められました。

2003 年より三回に亘り衆議院議員に当選され、経済産業省大臣政務官を務められ、東

日本大震災の復興にも尽力なされております。いただきました励ましは、当会の活動に大きな弾みになります。「日本人が自信を持ってもっともっとアジアに雄飛」に幾分なりとも役にたてればと考えております。

・ 本会報の新春号（No29）に、鈴木正誠様からいただいた「ICT 海外ボランティア会への期待」と題する巻頭言に、**“経済成長から取り残されている国や地域はむしろ拡大している。助けと援助を求める声は我々のところに届かないところで以前より大きくなっているはずである。これに応えようと経験のある専門技術者の方々が使命感を奮い立たせて新しい地域に新しい技術で貢献しているのが ICT 海外ボランティア会であると理解している。少なくともこの意気込みを共有する集団の熱気が伝染性を持ったものであればなお期待が持てる”**との励ましをいただきました。

・ トンガ プロジェクトの受注に成功しましたので、その特集号を組みました。これが巻頭言でいただきました励ましのその第一歩になり得るように、ささやかではありますが「百里の道も一歩から」の心境で進めて参ります。皆様のご支援をお願いする次第です。

村上さんの SV としてトンガでの活躍の一端を紹介したリレー寄稿も、特集号に彩を添えて下さいました。

・ JICA の SV 春募集が開始されました。前号の JICA 主催の募集説明会開催に加えて、今号では ICT 関係者が応募し易い要請案件の抜粋 並びに SV 経験を活かす会主催の「なんでも相談会」開催について掲載しました。多くの方の SV への挑戦を期待いたします。（以上加藤）

・ 3 月 11 日、東日本審震災１週根を迎えました。皆様もそれぞれの感概があったと思います。本誌でもタイミングを観て、関連記事を掲載したいと考えておりますので、皆様の寄稿をよろしくお願いします。（村上）

総編集長 ：ICT 海外ボランティア会 事務局長 加藤 隆
編集長 ：ICT 海外ボランティア会 報道部長 村上勝臣
発行 ： ICT 海外ボランティア会 （メール：sv@info.nttob.org/）